

感動の記録と「法政ランチ」：ある教育実践のなかから

OGATA, Ken / 尾形, 憲

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

46

(号 / Number)

2・3

(開始ページ / Start Page)

227

(終了ページ / End Page)

256

(発行年 / Year)

1978-10-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008372>

感動の記録と「法政ランチ」

——ある教育実践のなかから——

尾 形 憲

大学は研究と教育の有機的な結合を使命とする。それは単なる研究所とも、教育を主体とする高校以下の諸学校とも異なる。教師はたえざる知的文化遺産の創造＝研究の成果およびその姿勢を、直接間接に教育にかえしてゆかねばならない。さもなければ、その教育は十年一日のごとく、“黄色いノート”を読み上げる授業となる。一方学生は、狭い専門領域にとじこめられない立場から、未熟であり素朴でありながらも、新鮮な問題意識にもとづく疑問を投げかけることによって教師の研究に刺激を与えとともに、自らもなまくらなりとはいえつるはしを振るって、教師の協働者^{（1）}として文化遺産の創造作業に参加する。大学院レベルだけでなく、学部レベルでも、学生たちがこのように研究に十分参加しうるものであることは、たとえば過去数度にわたる筆者のゼミナールの学生たちの共同作業の成果がそれを示している。

（1） 法政大学経済学部尾形ゼミナール『私立大学の研究教育条件』資料第一集一～三（一九六八年）、同『私立大学の研究教育条件および体制』資料第二集一～四（一九六九年）、同『私立大学の研究教育条件および財政』資料第三集一～三（一九

七〇年）、同『私立大学の研究教育条件と労働組合』資料第四集一〇三（一九七二年）、同『私立短期大学白書』資料第五集（一九七七年）。

研究と教育のこのような有機的な関連にもかかわらず、大学における教育の立ち入った検討は必ずしも十分なされていないと言いい難い。もともと、新制大学発足後三〇年になんなんとしていまだに定着したとはいえない一般教育のありかたについては、各方面からさまざまな論議があり、これに対応する専門教育についても研究が進められている。⁽²⁾しかし、近年の大学の「大衆化」のなかで、明確な進学動機や目的意識もないまま入学してくる学生の増大に対し、とくにすさまじいまでの「マスプロ」教育の私大の現場で、有効に対応する教育実践の報告は寥々たる現状である。

(2) たとえば広島大学大学教育研究センター『大学における専門教育』（大学研究ノート第三一号）、一九七七年九月。

小論は典型的な「マスプロ」大学の「マスプロ」学部における現場の一教師のささやかな試みの報告である。それが、ある人の言葉を借りれば、「大海に石を投じているにひとしい」今日の私大の大学改革の試みに何がしかのものを加えると自負するつもりはさらさない。ただ、本文中でくわしく紹介するように、筆者の二〇年近い授業経験のなかで、学生がこれだけ感動し、筆者も学生の反応にこれだけ感動したことのないことは、まちがいのない事実である。

筆者は授業のあと、約一三〇〇人の受講者に対し、「これまで受けてきた教育をふりかえって」および「法政大学で学んだことは今後の自分にどのような意味をもつか」という設題の二つのレポートの提出を求めた。これらの膨大なレポートには今日の教育の荒廃の現状が如実に示されており、一応の整理をしておくことは、今後の研究および大学改革の素材として、なにがしかの意味をもつものと思われる。

なお、小論の対象は、昨年度学部で年間にわたり行なった「教育経済論」の授業を主とするが、そのほか、一〇月末から一月はじめにかけて行なわれた通信教育の地方スクーリングでの「経済学」の授業も含まれている。

1

筆者は一九六七年度からここ一〇年ほど、筆者の属する法政大学経済学部で、「教育経済論」を開講している。

この学部では、一九六九年の学園「紛争」のあと、大幅な改革を行なって、授業についてもそれまで一二あった専門の必修課目を五に減少させ、さらに七五年からは、経済原論なども含め実質的に必修をゼロにした。とくに「マスのプロ」大学で不可欠のゼミナールを補うものとしてのクラス授業「原典講読」を除いては、すべて自由選択課目としたわけであるが、「教育経済論」はこの自由選択の専門課目の一つとなっている。以前は登録者がそう多くなかったので、数年前から昼夜隔年講義としており、昨年は昼間部の開講となっていた。その内容は、昨年度の履修要綱では、つぎのように紹介されている。

「小学校から大学に至るまでの現在の教育は、多くの場合、種々雑多な無用の知識をつめこみはしても、むしろ個人をますます自立できない存在にしまっている。それはマイナスの教育であり、「非教育」でしかない。とくに、日本の場合、年々深刻になっている「落ちこぼれ」、非行、自殺などのいたましい犠牲は、学校教育が生み出した「被害」といってよい。大学についていえば、学生への八割を抱える私大の学費「紛争」は、世界でも類のない特殊日本の現象であり、また進学者の増大にともない大卒者のブルーカラー化が進行する一方、「指定校制度」が強化されるといったアンバランスが甚だしくなっている。

本講義は、こうした教育の現実のさまざまな矛盾を、日本資本主義の下部構造における特殊性といった視角から解明する。あわせて、世界的な教育改革の趨勢や、日本でのさまざまな事態の変化のなから、今後の教育、とく

に大学のゆくえを探ってみたいと考えている。夏休み明けと冬休み前にそれぞれレポートの提出を求め、これをもって試験に代える。なお他学部、他大学その他部外者の聴講を大いに歓迎する。

参考書として『学歴信仰社会』（時事通信社）および『私立大学』（日経新書）を使用する。」

講義の順序は、ほぼ拙著『学歴信仰社会』に沿いながら、1.問題提起、2.教育の現状、3.教育経済論の原論、4.日本経済と教育、5.私立大学問題、6.大学改革、7.諸外国の大学、8.大学（学歴社会）のゆくえ、となっている。昨年は受講者が予想外に多く、登録者数で見ると、三年生五七三人、四年生六七一人のほか通教生一四人で、合計一、二五八人にのぼった。七七年五月一日現在での学生数が三年生は一、一九八人、四年生は一、二四一人であるから、学部学生はその過半数が登録したわけである。講義を行なった大教室の座席数が三八八となっているから、登録数はその三・二倍をこえる。しかし、出席状況からいえば、前期は後の方になりに立っている者もあったが、前の方には空席も目立ち、まずは満席という状況であった。自由選択課目の出席状況はほぼ登録者数の一割から二割という筆者の経験からいえば、きわめて高い出席率といえよう。もっとも後期に入ってから、四年生の就職活動の関係もあってか、出席は前期の半分と「平年なみ」になっている。

最初の講義でアンケート調査を行なったところ、出席者の約半数が回答しているが、受講の動機はつぎのようである。

1. 教育（大学）問題に関心があつて 四〇人（二一・七％）
2. 他人の紹介、著書、新聞雑誌その他で筆者の名を知つて 三一人（一六・八％）
3. 履修要綱を見て 二八人（一五・二％）
4. 教職をとつてゐるから 二五人（一三・六％）

5. レポートで単位がとりやすい 二四人（一三・〇％）

6. 何となく 二〇人（一一・四％）

7. おもしろそう 一六人（八・七％）

なお、出身高校は東京内の二四・六％を含む関東七都府県が回答者一七一人の五九・一％を占め、これに静岡、山梨、長野、新潟を含めれば七一・九％となっている。

2

さて、前に掲げた履修要綱でも見るように、筆者はこれまでも、他学部、他大学、その他のいわゆる「ニセ学生」を歓迎してきた。大卒のパスポートだけが目あての学生が圧倒的である現在の大学にあって、純粹に学びたいという意欲に燃える彼らは、「地の塩」とでもいってよい貴重な存在である。一昨年の春、小学生の二児をもつ三七歳の母親が筆者のゼミナールの受講を希望して訪ねてきた。子どもを通じ、現在の公教育の荒廃を痛感したからということであった。この年の新ゼミ生は彼女を含め二〇人であったが、そのうち女子が七人ということもあって、ゼミとして女子の高等教育の問題を共通テーマとすることになった。こうして私立短大がとり上げられたわけである。彼女はつねに若い学生たちの先頭に立って、私立短大に関する資料や研究の整理・分析に献身的な努力を重ねてくれた。そうしたよきリーダーのもと、でき上がった研究成果がさきにもふれた『私立短期大学白書』である。現在の閉鎖的で沈滞した大学の風通しをよくし、学問的風風をよみがえらせるためには、合法的な大学間交流や開放講座などもさることながら、このような「ニセ学生」の存在意義はきわめて大きい。

昨今こうした主婦、社会人、他大学生、他学部学生、卒業生など、単位にかかわらない「ニセ学生」が、筆者のゼミナールにも講義にもふえており、それなりに大きな意味をもってきた。昨年度の講義では、これではまだ不十

分と考えたわけである。とくに、講義のはじめの部分では、かなりの時間をさいて、教育の荒廃の現実を話すことになっているが、その際、「借りもの」で自分が話すより、教育の荒廃の現場で苦闘している人々に、直接語ってもらう方が印象的ではなからうか。そして、そうした現実がどこから生まれてきたかを日本資本主義の歪みの投影として経済学の角度から検討する講義の後段になっても、そうした外部の人たちによる問題提起はくりかえしてあった方がいいのではないか。

こうした発想にもとづいて、最初に、ある座談会で知りあった、東進会という塾の教師八杉晴美さんに話をお願いした。⁽¹⁾氏はかつて東京教育大学の学生として教育実習をしていたころ、持ちまへのあけっぴろげな気性とベランメエ口調、たえず脱線する授業で子どもたちとすっかり仲よしになった。最後の総仕上げに教頭以下の教師たちのまゝで研究授業をしたときも、相変らずボロシヤツにサンダルばき、チョークをズボンのポケットにつっこんでといういでたちで、「おめえら、こんなことわかんねえのか」、「バカこけ!」と、子どもたちとゲラゲラ笑いのうちに授業をやったのけた。

(1) 八杉さんの塾については、たとえばその著「先生塾は悪いのですか」、斎藤茂男「教育ってなんだ」(上)など参照。

だが、このあとの講評はさんざんで、教頭からは「教師失格」ときびしい批判をうけた。「ようし、学校の教師などなってるものか」と決心した八杉さんは、一九五八年以来二〇年間、落ちこぼされた子どもたちを拾いあげる塾の教師を続けている。この塾は、勉強ができないで、教師や友だちからバカ扱いされ、「おれはできねえんだ」と思いこんでいる子どもたちの「野戦病院」である。そうした子どもの一人A君がみごとに「わかる」ようになり、成績も学校のクラスの上位になったので、「オイ、そろそろ塾やめていいぞ」といったら、A君はキョトンとした顔で、「ヘンなこというなよ、先生。オレ、あんたにホレてんだ」「そうか、オレもオマエにホレてんだ」。女の子が

「そんじゃ結婚しちゃったら？」といった調子である。

この塾では月に一度ぐらい、地域の魚屋とか花屋とか時には警官とかをよんで、子どもたちに仕事の話をしてもらっている。子どもたちはふだんふれることのできなかった大人の労働のなかみを、そのつらさも楽しさもふくめて知る機会を与えられる。学校がせねばならぬことを、むしろこうした塾がやっているのである。

八杉さんはいう、「一時間かかってわからなくとも二時間かかってわかる子どもは、二時間かけて教えるのが教育だ。五分でわかるのが高級ということとは絶対ない」

またいう、「中一だから中一の学力をつけねばというのは、弱者が強者になりたい、あるいは黒人が白人になりたいというのと同じだ」

こうした話をして頂いたあと、アンケートをとったところ、学生たちの反応はすさまじかった。

「授業をまじめに九〇分きいたのははじめて」

「大学に入学してはじめて生きた教育を受けた」

「今日、真の教育を見たような気がする」

「教師を志す者としてもう一度教育について考え直す必要がある」等々。

いかに、今日の大学の授業が学生にとり魅力のないものになっているかが、如実に暴露されたわけである。ともかく、「こうした試みをぜひ続けてほしい」という声が圧倒的であったのに力を得て、つぎに、これもだいたい昔ではあるが、ある座談会で知己となった荒川区立第九中学校の塚原雄太さんに、夜間中学の現状についてお話願うことにした。ところが、塚原さんは、「そういうことなら、生徒のなかに、自分と同じ一九二〇年生まれ、同じ栃木県出身の人がいる。奇しくも生まれた時は同じ星の下に生まれた二人が、どういう人生の歩みのちがいが、一方

は教師となり一方は生徒になったか、いわば生き証人として自分と一緒に話をしてもらおう」と言つて下さった。願つてもないことである。その生徒というのは当時夜間中学三年在学中の白井家光さんであった。

はじめに塚原さんから夜間中学の概況⁽²⁾について話があった。戦前も義務教育レベルの夜学校があったが、その流れをくんで、戦後新学制の発足とともに、夜間中学校ははじまった。戦後の混乱期のなかで、働かねば食べられないという学齢期の子どもたちのために、昼の授業のあと、教師たちは夜もまた授業を行なったのである。そうしてはじまった夜間中学が今でも全国で三〇校近くあり、約二、五〇〇人の生徒がいる。はじめは学校長欠の学齢内の子どもが多かったが、そのほか、引揚者、在日朝鮮（韓国）人、戦前義務教育を受けられなかった人など、さまざま、今は、最高六五歳から最低一三歳にまでわたっている。とくに最近また目だってきたのは、一三、四歳から一五、六歳という、落ちこぼされた子どもたちがふえていることである。高校全入以前に小学校全入、中学校全入が問題にされなければならないのではないか。現在文部省はむしろ社会教育の中へ解消させる方向で夜間中学をなくそうとしている。

(2) 夜間中学については、塚原雄太『夜間中学』、『私は口をきかない』、岩井好子『うどん学校』など参照。

それから、五七歳の夜間中学生白井家光さんの話がはじまった。

「皆さん、こんにちば。私は荒川九中の夜間中学校三年在学中の白井家光と申します。私がこんなにうざなところで最高の学問をやつてらっしゃる皆さんの前でお話をするということは、まことにおそれ多いことですが、塚原先生に、生いたちのこと、なぜ夜間中学に行かねばならなかったか、行つてどうなったかを話してくれということなので、おそれながら一端を申し上げます。まだまだ夜間中学をたよりに勉強したいという人間もたくさん居るのだということを知つて頂けますれば、私もまことにしあわせでございます」

白井さんが生まれたのは、栃木県的那須岳のふもとであった。運命の悪戯というか、不幸な星の下に生まれた二人兄弟のうち、四人が小さいとき相次いで世を去った。貧乏のどん底で、医者にかけることもできなかったと思われる。七歳のとき、子どもとして誰よりも頼りにし、大事な母も、腸捻転のため床に就き、医者にかける金もないまま、針金のようにやせ細って亡くなった。毎日の生活からして、米を一合、二合、時にはやっと五合と買ってきてという状況である。

母が亡くなった年、隣村の農家へ子守奉公に出された。朝はまだ暗い三時半か四時に起こされ、炊事、洗濯、掃除、それに馬にえさをやったり風呂の水を汲んだり、こまねずみのように働く。そんなぐあいだから、御飯もよく焦げができるが、そうした時は主人にこっぴどく叱りつけられ、囲炉裏の太い金火箸で頭を叩かれる。そして食事をさせられないのである。おかみさんはそんな時もやさしい言葉一つかけてくれなかった。裏の井戸へ行って釣瓶で水を汲み、腹を満たすが、泣きながら母の名を呼んだこともよくあった。

この家の主人とおかみさんは、四歳の子どもをおぶせて野良仕事に出てゆく。この子どもは「いざり」で歩けないので、おぶいどうしである。腹がすいてどうしようもない時は、鶏小屋からこっそり卵を二つ三つもってきて、便所に入って中身を飲み、殻はわからないようにこまかく砕いて捨てた。生いもや生人参、生大根をかじることもあった。

給料は一年分、二年分とまとめて父が前借りして持って行ってしまうので、一銭も自分の手にはわたらない。盆暮れや鎮守様の祭、学校の運動会などの時、綿あめの一つ、金つばの一つが食べたいと思っても、自分の小遣いといつたものはなかった。そこで、道路に落ちている釘などの金もの、ボロきれなどを拾い、家の人にみつからないようにかくしてためておいて、屑屋に売ったりして小遣いにした。竹やぶで孟宗竹の皮を集めてきて売ったことも

ある。

同じ年ごろの近所の子どもたちは新しい鞆を背負って学校へでてゆくが、そんな姿を「木かげからだただ羨しく、涙ぐんで見送る」毎日だった。そのうち、子どもをおんぶしたまま、あとについて学校へゆくようになった。那須郡岡小学校というところである。一年生の教室の外に立って、なから「ハナハトママス……」と聞えてくる先生や生徒の声に耳を傾けた。背に負っている子どもが泣くと、はじめは「うるさいからあっちへゆけ」と追い払っていた先生も、一生懸命字を覚えようとしているのがわかると、黒板の字なども見えるようにと窓のガラスの下二枚を疊りから素通しにかえてくれた。ちびた鉛筆や生徒が捨てた紙などもくれ、「2 たす 2 は 4」、「3 から 1 引けば 2」など書いてくれたり、「ソ」は上から下へ引くばるし、「ン」は下から上へだぞと教えてくれたりしたのは、ほんとうに有難かった。片仮名でもいい、平仮名でもいい、何とか字を覚えて、仕事がつらいからつれて帰りに来てくれと父へ手紙を出したかったのである。しかし、やっと出した手紙も、切手を貼ることを知らなかったために、送り返されてきた。

一〇歳になって、周旋屋の世話で東京へ丁稚奉公に出された。はじめは煎餅屋だったが、そこから八百屋、乾物屋などと転々した。朝は四時に起こされ、夏だと前夜の腐りかけた御飯を食って、昼休みもなく夜半まで働かされる。やっと仕事を終えて風呂に入り、寝るのは一時、二時になったりすることもある。何より困ったのは無学であるため、お金の勘定もよくできないことだった。つり銭を少なく渡した時は、客は文句をいうが、多く渡した時はそのまま持って行ってしまう。売上げが合わなくて、「またお前のせいだな」とこっぴどく叱られることがよくあった。注文とりに行っても、注文をうけて「オサケライッポン」とたどたどしい片仮名で書いているうち、気の短いおかみさんなどからは、「小僧さん何やってんだい、そんなにいつまでも注文がわからないなら、あんたのここ

からはもうとらないよ。どこにでもお店はあるんだから」と怒鳴られる。そんなにしておとくいをなくして主人に叱られては、居たたまれなくなつてその店をとび出すということの繰返しだった。

漢字などまったくわからないのだから、新聞も読めない。今世の中にどういうことが起こっているのかわからないし、人と話しても、ちょっとむずかしい話になると自信がなくなつてしまふ。それで何とか漢字を少しでも覚えたい、勉強したいといつも思つていた。そんなわけで、あとで子どもが大きくなつても、金は残せなくとも、義務教育はもちろん、できたら大学ぐらい入れてやりたいと思つていた。これは親心として当たり前のことだと思ふが、結局上の学校へ入れることはできず、今でもほんとうに申しわけないと思つてゐる。

そのうち、洋服の縫製の職人をやるようになった。二七、八年その仕事を続けたが、これから先はおそらく註文洋服は少なくなるだろうし、年をとると視力も落ちる。一人でコツコツやつていたのでは、食うにもこと欠くようになるだろうと、洋服屋をやめて、荒川区民会館で用務員をすることになった。書類を役所に持つて行つたりきたりする仕事だが、「間違ひなく持つて行つたと書いておけ」と言われても、書けない。恥ずかしいがそばの人に書いてもらつたりということになる。事務員になるといろいろな書類を起案したり、意見を申し出たりすることもできるが、用務員にはそんな権利もない。出勤簿も、いくら古くから居ても用務員は一番下に名前が書いてある。会議でも、ほかの人はみんな会議室に集まつていろいろ意見を言つてゐるが、用務員だと、「お前留守番してろ」と、ロボットみたいな仕事しかさせられない。そんなことで、これはどうしても字を覚えなくてはならない、何とか勉強させてくれるところがあればいいのだが、と思つてゐた。

何年もたつて、異動で荒川図書館へ行つた。係長がたまたま中学から高校まで夜間で行つた人で、新聞で塚原先生の書いたものを読み、荒川にも夜間中学があるのを知つて、行つてみないかと勧めてくれた。こうしてはじめて

学校というところへ行くようになったのが、五五歳のときである。行ってみたら最年少は一七、八歳から、上は六五歳、自分がそのつぎだった。入る前はいろいろな不安があったが、入ってみると年齢なんてものは関係がなく、いじめるとか意地悪とかいったものはない。みんな本心から、何もかくすことなく話しあっている。

そういうなかで二年あまり勉強して、来年の春は卒業というところまできた。このごろは先生がたのおかげで漢字もだいぶ読めるようになったし、むずかしい言葉の意味も少しはわかるようになった。新聞も読めるようになったし、役所へ出す書類を見ても、こういう書類だなということもわかるようになった。ほんとうに有難いと思っている。この学校へ入る前は、恥ずかしいがこんなこともあった。我孫子に住んでいた友達が「遊びにこいよ」と言ってくれたので、「どこだっけ」と聞いたたら「アビコだ。わからなかったらワガマゴコといえわかるよ」と言う。アビコは忘れてワガマゴコだけ覚えていたので、何ヶ月かたつて遊びにゆこうと、駅で切符を買うとき「ワガマゴコ下さい」と言ったら、「この忙しいのにふざけないでくれ」と叱られた。このごろはそんなこともなくなった。

世の中には義務教育も終っていない人がまだまだたくさんいる。家が困って学校にも行けなかった貧困の犠牲者、戦争の犠牲者、学校がきらいで行けなかった人などいろいろある。そして勉強は学校以外ではできないものだ。自分でやれるという人がいるが、そういう人は何万人に一人か二人しかいない。また美容師とかマッサージュ師とか、技術はりっぱでも中卒の資格をもっていないため免状がとれなくて、夜間中学に来ている人たちもいる。

「私と同様な、世間はまだ何千何万という、学校に対してほんとうに不幸な人々のため、また夜間中学のため、私は卒業しても頭張りたい。困っている人たちのため夜間中学を守りたいと思います」

こう言って終った白井さんの訥々たる話に、教室にあふれた学生たちから文字通り万雷のような拍手が長く、長く続けられた。このあと再び塚原さんから夜間中学についての補足的な話があって全体を終わったが、受講した学

生たちから感想を書いて出してもらったところ、

「目がしらが熱くなるのを覚えるほどの感動」

「これぞまさに学ぶということの純粋な動機であろう」

「大学は学問をするところだ。しかし私は夜間中学の生徒のような勉強をしなければならないことを感じた。形式だけの学問など何になる！」

「白井さんの半生を聞いて、教育国家、福祉国家の建設という政治家たちの言葉のしらじらしさを感じる」

「今の自分が情なくなってしまう。何の苦勞もせずにこの大学に入って、週二回登校するぐらいのものでした。今までの考えを直し、大学生としてはずかしい人間になります」

「胸がしめつけられる思い。深く考えさせられた」

「現在の自分と白井さんの境遇を考えると、全然收拾がつかぬほどショックを受けました。本当に現実こんなことがあったのですね」

「今自分がおかれている立場、環境をもう一度見直したい。今の教育制度はこのままでよいのかと疑問をもつ」

「学校以外では九分九厘勉強できないと言われた白井さんの言葉がぼくの心につきささってきた」(明治学院大生)

「すごい感動、今まで受けたどの授業よりも真に迫るものだ。自分自身が何のために大学に来ているのか、大学で何をしているのか、学歴だけを求めに違い九州から出てきたのかという疑問を強く感じた」

「授業とはこのようなものだ。安易な同情などはいけなと思うが、生きた教育の現状を見せられたような気がする。教育の現状を知るようになるにつれて、虚しくなり、怒りがこみあげてくる」

「特に考えさせられたのは、教育とは本来何のためにあるのか、ということですよ」

「今の自分がはずかしい。ただこの一語につきる」

「筆舌につくしがたい感銘をうけた。自分がどんなに恵まれているかを知った。白井さんの話は教育のひずみの生の声だと感じた。また塚原さんの夜間中学への情熱にただ頭が下がる」

「大学にはいけない四分の三の人々のことを考えなくてはならないと深く反省させられた」

「せめて自分の子どもは大学へと思ったが、やれなかったのは本当に申しわけなかったという白井さんの言葉を重く受けとめた」

「『教育に対して不幸』という言葉が心に強く残った」

「今の世の中の何ともいえない冷さ、非情さを感じた」

「本当の教育って何だろう？　ばくは四年間浪人した。なんとバカげたことをしたのか！」

「働いたお金が自分の手に入らない。小説でしか知らない世界、そのなかに引きずりこまれるようだった。無学は情ない——この言葉を白井さんの口からはかせたのは誰だろう、親の問題？　本人の努力の問題？　それとも……大学という場で学ぶ自分はこの問題をどう受けとめたらいいのだろうか。それに値するだけの学問をやっているのだろうかということをあわせて問われる。これからだ」

等々。そして、「私たちも頑張ります。塚原さんも白井さんも頑張つて下さい」という励ましの言葉に、二人は喜んで帰って行った。

現在の学生たちは「無感動」だという。そんなことはない。彼らは感動する機会を与えられなかったただけだ。

このあと、前期は、当時毎日新聞に連載中の「揺れる学歴」を取材している記者の矢倉久泰さんに学歴社会の実態を話してもらった。前二回のような現場からの声を聞いての感動はなかったが、それでもとくに就職問題を目的にした四年生からは、学歴社会の現実がよくわかったとの声も多かった。

3

後期に入り、授業の内容は、教育の荒廃の背景にある日本資本主義の現実を、「冷静な頭脳」で分析する段になったが、前提としてはたえず「暖かい心」がなければならぬ。このため、問題提起として、前期と同様、講義のあい間に、教育の現場で苦闘しておられる方々を三人およびして、話をして頂いた。

はじめは、川崎工業高校の定時制の教師菅竜一さんである。普商工農という言葉に表わされるような差別の底辺にある職業高校、それも定時制での菅さんの、文字通り体当たりの教育実践は、学生たちの心を大きくゆさぶった。二〇年の高校教師生活のうち、定時制が一七、八年だったという。生徒は、東北地方の中学を出てこの近くの東芝、日電、富士通などへ集団就職してきた子どもたち、全日制に落ちて行くところがなくここへきた生徒などさまざまで、なかには貧しいため若い時勉強できなかった、三人の子を持つ四〇歳の社会人もいる。

戦後の綜合制高校は、人世の縮図のようで、将来進路がちがうさまざまの友人がもてた。農民になるのもいれば、卒業してすぐ電気会社へ就職するものもいる。大学へゆくものもいる。今の教育の致命的欠陥は、将来の進路も学力も家庭環境もすべて似ている子どもたちを輪切りにし、単一集団として一ヶ所に集めれば、教育の効率も上がる、という発想にある。とくに高校「多様化」にともない。同じ工業科でも、工業化学科と化学工学科というようにな、しろうとはまるっきり区別のつかないような学科に細分されてくる。前者は実験助手を養成するが、後者は石油化学コンビナートのオペレーターとまるでちがう。高度成長経済とともに、こうした多様化がすさまじい勢い

で進められるなかで、職業高校は「バカのゆくところ」ということになってくる。

去年卒業した生徒たちのなかにF君というどもりの生徒がいた。勉強もできないし、体育もダメ、コンプレックスのかたまりのような子どもである。クラブにも入りようない。そこでどのクラブにも入れない子どもたちを集めて、「読書クラブ」を作った。読書クラブといっても、読書は一切しない。馬鹿話をやつたりしてまずしゃべりあうことからである。たまたま卒業生で大島の定時制高校の教師をしていたのが居たが、そこへクラブの生徒たちをつれて行って、向うの生徒と交流したら少しは変わるのではないかと考えた。交流の手みやげとして劇でもやったらと言ったら、何しろ小学校のころから学芸会でも「ならば大名」ばかりやらされてきた生徒たちで、一旦は難色を示したが、台本を読む朗読劇ならということになった。内容は生徒たちに仕事や生活の有様などを書いてもらって、くにもとの親たちへ送っていた学級通信と、これに対する親たちからの返信である。

とくにF君には何とかこの劇をやらせたい、どうでもいいからやってくれないかと思っていたが、彼に「おまえどうする、やれるか」と聞いたら、「短くてもいいから、やりたい」という。そこで稽古をはじめたが、何しろ生れてはじめてで、猛烈にどもる。残酷な年ごろだから、仲間はゲラゲラ笑うが、稽古が進むなかでF君が一生懸命やってるのを見て、笑わなくなり、彼を支えるようになった。大島へ行っての本番でも、彼はどもりどもりやっていたが、そのあと、向うの生徒のお母さんたちは、「スラスラしゃべる生徒たちより、あのどもりながら一生懸命やってる子どもに、私は涙が出た」と言ってくれた。彼は生きる自信をもつようになる。そして帰ってからの学習も、目に見えて進むようになった。

四年になって読書クラブのメンバーも、全校の弁論大会に出ようということになった。F君を出したいところだが、朗読劇みたいにつかえたら小さな声で教えてやったりできるのとはちがう。壇上で絶句してほかのクラスの生

徒たちに「どもりひっこめ」などとやられたら、今までの苦勞も水の泡である。だがクラブの子どもたちはF君に、「おれたちがみんな出るよりお前一人出る方がすばらしい意味があるのだから、絶対出る」というし、F君も「出たい」という。何をしゃべりたいかと聞くと、大島の朗読劇のことを語りたいという。四年生だから、一年生や二年生たちに、こういう体験をすれば学校は意味があるようになるということを話してやりたいというわけである。「大島合宿の思い出」と題もきめ、練習を重ねた。当日F君は冒頭、「皆さん、ぼくはどもりです。これから話をする内容は二年生の時の体験です。どもりで聞きづらいだろうけど、皆さん、最後まで聞いて下さい」とはじまり、堂々とどもりながら話をするのである。

こうした話をして頂いた次の講義は、正直いってこわい。そこで年間二十何回、そういう感動を毎回与えることなど出来やしない、一年に一度ぐらいあればいいのだと、開き直ったが、学生の方は、「先生は年に一ぺんあればいいなどというが、そういう授業をもう三回も受けられた。四回目を期待している」と答えてくる。

つぎに来てもらったのは武蔵野市井ノ頭小学校の教諭遠藤豊吉さんである。前期の試みが毎日新聞紙上に報道されていたのを見ていた遠藤さんは、「塾の教師というからには八杉晴美だろう。夜間中学といえば塚原雄太にちがいない。八杉晴美や塚原雄太をよんで、ぼくに声をかけてくれないのは、尾形さん片手落ちだと思っていた」と、二つ返事で来てくださった。遠藤さんは戦争中特攻隊員として死の訓練を受けた体験からはじめて、自分の経験のなから、教育とは一体何なのか、人間を育てるというのはどういうことなのか、あるいは育てるなどということを意識しないまでも、人間と人間とがかかわりあうということはどういうことなのかを話された。とくに小学校の現場の一教師として、教頭になりたい校長になりたいと上ばかり見て生徒を見ない「ヒラメ教師」たることを峻拒

し続けている遠藤さんの実体験は、教師志望も少ない学生たちに大きな感銘を与えた。

最後は、菅さんから、障害児の教育に当たっている神尾裕治さんはどうかというお話があって、神尾さんをお願いした。葛飾盲学校の教諭でまだ三〇歳という若い人であるが、弱視で智恵おくれという重複障害児を相手にしている。私たちが毎日生活していて、何気なくやっていることが、彼らにとっては一つ一つ学習の課程なのである。神尾さんが受けていて、どうしても食べものを飲みこめない子どもがいる。バナナを口に入れてやったら受け付けたので、しめたと思っていたら、次の日、バナナが腐ったまま口の中にあった。ものを食べるということは人間にとって本能的なものだと誰も思っているが、実はそうではないのである。また目の見えない子どもにもどう空間感覚をわからせるか、私たちには想像を絶する「忍苦」^①がある。学生の一人は、講義が終つてのアンケートに、「人間一人ひとりの価値を大切にしてくること、『生の重み』をかみしめてゆく、ということ。共感できます」と書いている。

こうして一年間、六回にわたり七人の方々に来て話して頂いたが、どの回も学生に大きな影響を与えてもらったばかりでなく、筆者自身も、ともすればマンネリになりがちな「マスプロ」大学のなかで、大きな感動を受けた。そしてとくに意図したわけではなかったのに、筆者を含めれば、小学校、中学校、高校、大学、塾、特殊教育、さらにそれを外から見たマスコミと、一そろい全部そろったわけである。そこで、筆者も学生たちも受けた感動をできるだけ多くの人々に共有してもらいたいと、月刊『教育の森』の編集部と相談して、座談会を企画してもらった。その内容については同誌一九七八年五月号を参照されたい。^① 毎回およびした方々にはまったくの無報酬で、喜んでおいで下さった。ここに改めて心からお礼申し上げます。

(1) 同誌「死にかけた教育に蘇生はあるのか」

4

後期の授業が行なわれていた一〇月末から十一月はじめにかけての五日間、筆者は大学の通信教育の地方スクーリングで、十和田湖畔に出かけた。通信教育では、卒業に必要な一二四単位のうち、四分の一以上をスクーリングでとらねばならないが、以前は当該大学のキャンパスへ学生が出席してでなければ認められなかった。最近やっと、地方に教員が行ってやつてもよいということになり、第一回の地方スクーリングとなったわけである。ただ残念ながら、折角地方スクーリングが認められるようになったのに、今度は教員の方の腰が重く、専門課目の開講ができず、さしあたり一般教育の二課目と外国語、体育だけとなった。筆者が担当したのは、一般教育の経済学であった。

筆者の講義の受講者は三七人であったが、全体では約八〇人であった。地元青森が最も多かったが、それ以外の東北各県、北海道、東京、愛知から、遠くは映画「八甲田山」を見たのでという長崎の学生にまで及んだ。講義の内容はほぼ学部教育の経済論を圧縮した形のものであったが、わずか五日間とはいえ、同じ旅館に泊りこみだから、夜も学生たちがこちらの室へ来たり、こちらから向うへ出かけたのである。昼の授業の続きの議論もあるが、酒をくみかわしながら身の上話も出るし、通信教育の学生は校歌を知らないから教えてくれという声が出たり、夕食後の懇親会で歌った流行歌の英語版をもう一度という希望があったりで夜半になる。翌日の授業は、本論に入る前に、黒板に歌詞を書いたの「歌唱指導」である。

学生たちのほとんどは有職者で、公務員が多かった。日本文学科に、二人の孫をもつという四九歳の「おばあちゃん」学生がいた。秋田で四〇人ぐらいの人を使っている小企業だが、結婚して五年目ぐらいから夫が病の床に就

き、姑も寝たきりの「恍惚の人」になった。齒を食いしばって仕事の采配、家の世話と身を粉にしたが遂に病に倒れ、そのころちょうど信頼していた幹部社員たちからも逃げられた。

「いま私はもう苦勞なんかしたくない。苦勞しなければ一人前の人間にならないという言葉も知っている。しかし苦勞はしたくない。

できれば小学生がそのまま年をとったようなおらかなおばちゃんになりたい」

十何年かの苦勞のあと、長女も嫁ぎ、長男も大学を出て家業を継いだ。やっと一息ついて、今までできなかった勉強をはじめたという。ほかの学生たちは、彼女のことを「お母さん」とよんでいた。

一方「お父さん」も居た。岩手から来た五三歳の法学部の学生である。盛岡で生まれたが、小学校六年のとき、家の仕事で失敗して夜逃げしたという。夜半に起こされ、鍋や釜など家財道具をもって家を出た時は、明日から学校へ行かなくてすむと思つて喜んだそうだ。列車の中で大きな荷物を持っていたので、車掌に怪しまれたりしながら宮古へ行った。小学校は卒業免状をもらわないままで、高等小学校を終え、戦後、国鉄の車掌をやったり、土建労働者をやったりで、その後一七年ほど医大で看護や解剖の仕事をしてきたが、このごろは図書館勤務である。八年ほど前から志を立て、四年で通信制高校を終え、夜間の短大も三年で卒業したが、この年になつても卒業式は涙が出たという。大学の通信教育には前年の春、三年編入したが、卒業まで三年ぐらしかけるつもりということであつた。

そのほか、障害児施設勤務、保育所の保母、料理人などさまざまな「人間模様」であつた。菅さんのいう「単一集団」でないところに、こうした学びの場の面白さがある。彼らの一人は言う、「あの校歌の特訓は、私が法政の一学生であることを自覚させてくれた」

スクーリングが終ってから、学部の場合と同様、「これまで受けてきた教育をふりかえって」という設題でレポートを提出してもらった。一人ひとり、あらためていろいろなことを考えさせられたが、そのなかに父親から受けた教育を書いたものがあつた。レポートは点数をつけ序列づけをするための材料ではなく、教育の一環でなければならぬ。そうした意味で、書いた本人にとってもプラスになり、読む教師も「教育」されるレポートを書いてほしいと要望したが、こうした要望にみごとにこたえてくれたレポートであつた。

「ぼくはずいぶん世間と違った環境に育った気がする。といっても本人にとっては、それが当たり前で世間もそうだと思つてゐたのだが……」

二八歳でこの年法学部に入ったF君の父は京都のある医大の教授だつた。医学者ではあつても医者ではなかつたので、とてつもなく貧乏な家庭だつた。研究、研究のあけくれで自分の金までつきこんでしまふ。自分の家など持つ気もなく、彼が生まれてから二〇歳になるまでの間、追いつてをくって八回も引越したほどである。

父は朝五時には、書物で破れんばかりの鞆を重そうに持ち、大学の研究室へ行つた。日曜も正月も盆もなかつた。家族そろつて今どきのレジャーらしいものは、ほとんど味わたつたことがない。でも世の中はこういうものだと思つてゐた。父は夜一〇時すぎ、まんじゅうを買つて帰つてきて、弟と寝てゐるところへ入り、一〇分ぐらい話をしてくれた。川中島の戦いで塩を送つた話からはじまり、国定忠治、吉良仁吉から孔子や孟子も出てきた。

中学まではともかく出たが、高校へ進んだころはヤンチャクレの頂点で、三つの高校を転々したがとうとう卒業できなかつた。一九歳の時少年鑑別所に入れられて以来三度世話になつた。その時、父が一回だけひょっこり現われて、「妙なところにいるなあ、お前がいないと家中が静かでないよ」といいながら、頭のとっぺんから足の先まで何度も見てゐた。彼も、「ああ、世の中もうつとうしいことばっかりで、自分おいてもらおうと思つてる」とい

うと、「ウーン」とほえみながら、スーッと帰ってしまった。あとで父に聞いてわかったことだが、父は「健康状態を見に行っただけだよ。命さえあればな……おれはお前を信じているよ」と言った。

彼にも「年貢の納め時」が来た。審判によって少年院送致をきめる日である。家裁では父をよび出して、「あなたは大学の先生でもあるし、社会的に地位もあり、立派な人だから、もしあなたがあの子をひきとるとおっしゃるなら、家に返してもいいんですよ」といったが、父は「私は医学の世界に生きる人間で法律は専門じゃありません。あなたの好きなように処分なさって下さい」といい、「法は法であり、自分の息子だけは、という考えはまちがっています」といいきったそうである。あとで教官からそんなやりとりの話を聞いて、「あいつはそういう男よ」と小さく笑ったら、「なんちゅう親子じゃ、おまえらは」と非難の的になった。

「ああいう言葉のやりとりのなかにある僕と父との底はかかない熱いつながりを誰も知らなかった。僕は父を信じている。父も僕を信じていてくれた」

審判の日、出入口のドアの横に母は小さく座っていた。悲しみを胸いっぱいにあふれさせ、母は何も言わずにただ黙って座っていた。「少年院に送られてもいいのかね」これが裁判官たちの切り札だった。彼は「社会に出たら真面目にやれるかね」と聞かれた。「ハア」と恰好だけ言えは出してくれるのだが、「おれが今までやってきたのは、みんな真面目だ。あれが真面目じゃないというなら、出ても真面目にやる気はない」と聞き直った。結局傷害、公務執行妨害、刀剣類不法所持で少年院送致と決定した。引きあげる時、出口で母は目に涙をいっぱい浮べて泣き出しそうだった。その目は、「この子はどうして謝らなかったの。済みませんとどうして謝ってくれなかったの、どうしてこの子は……」と語っていた。彼にははっきりわかった。「すまんのう、かんにんしてくれや」と思っても、口から出た言葉は「わしゃちょっと行ってくるさけ心配すんなや、わしはどこへ行っても元氣やさけ」。

そしてまた暗い廊下を戻っていった。

一年一ヶ月たって出てきた彼を、父はまた大きく深く包んでくれた。それから彼は板前となったが、この世界は半分堅気半分極道の封建的徒弟制度の代表みたいなところで、人は「絶対もたんからやめろ」という。忍耐、我慢、辛抱、と人の三倍がんばってだんだん腕を上げ板前としてのランクも上がれるところまで上がった。一年と一日、三七六日一日も休まなかったこともある。

女あそびもした。バクチもうった。酒もあびるほど飲んだ。世の中でほとんどのことはやった。やってないことといえば、泥棒と消防車に乗ることぐらい、いやもう一つ、それが勉強だった。しかし、勉強だってやればできる。やる気を起こさなかっただけだ。彼は決めた。勉強する！と。何がそう決心させたか、それは父の「信じている」、その言葉一つよりほかない。昭和五二年六月、彼は法政大学の通信教育部に入学した。

その年の五月、父は血を吐いて倒れた。八月に京都へ帰った時、父はこういった。「くたばらなくて残念か。無理せんとあがなばれよ」と相変らずの口調だった。それが面と向って言った父の最後の言葉だった。再び入院した時はもうだめだった。昭和五二年一〇月九日、七時二〇分、死んだ。父は三年ほど前彼にこう言った、「あと三年かなあ」と。

そして六〇歳の還暦の日に、母が長生きして下さいねと言ったら、「来年の誕生日は迎えられないかもしれないぞ」と何気なく言ったそうである。主治医の話だと四年ほど前癌がすみついていたという。父は論文を仕上げるためずいぶん無理をしたらしい。時間がない、時間がないと、家につくと玄関から這ってあがる日が何日か続いたという。

死ぬ間際に母が彼と弟、「サブとジンを呼びましようか」と聞くと、「呼ばなくていい、誰も呼ばなくていい、お

れは土に返る」と言ったそうだ、サブとジンに何か言っておくことはありませんかと聞いたら、父は「何も言うこととはない。おれが二十何年育てた子どもたちだ。何も言うことはない」と、たいへんな自信だったという。また「サブがとうとう勉強しだしたか、あのオッチョコチョイが」と喜んで母に言ったということだ。

彼はこのレポートの最後に書いている。

「ぼくはとてつもない大きな愛に包まれていたような気がする。ぼくはこれから父が歩んだ道を、おくれればせながら歩いていこうと思っている。カエルの子どもはカエルであった。自分ほど親不孝した子どももいないと思う。今ぼくは死にものぐるいで半泣きになっても、血を吐くまで学問の道を歩こうと思っている。孤独になっても、貧乏でも、あの世へ行った時、父に土産話をいっぱい持っていきたいから……」

5

はじめにもふれたように、「教育経済論」の受講者については、前期の終に「これまで受けてきた教育をふりかえって」、後期の終に「法政大学で学んだことは今後の自分にどのような意味をもつか」という設題でそれぞれレポートの提出を求めた。レポートへの評価はAかDか（“pass or fail”）であり、前期のレポートでAとなった者は後期は提出しなくともよい。結局レポートを提出した者は一、〇九四名、二度にわたるレポートの総数は合計一、二五一通に及んだ。いずれの場合も四〇〇字一〇枚前後ということにしていたが、わずかに二、三枚程度のものから最高四五枚という“力作”まである。設題の性格からいって、レポートの内容が同じということはありえないわけであるが、それにもかかわらず、前期のレポートで同内容のものが二通あった。ここでは前期のレポートを主にして、そのなかに現われた特徴点や問題点の一端を書き出してみることにする。

はじめに、あらためて気づかされたことは、毎週マイクを通じて語りかけている学生たちが、けっして“学生大

衆」という衆合名詞、マスなのではなくて、一人ひとりみな固有多詞をもち、ちがった「ルーツ」をもつ学生たちである、ということであった。中卒後、貧しいため準看護婦学校——定時制高校——高等看護学院——法政短大——大学編入とか、父が在日朝鮮人で母が日本人、義務教育を朝鮮学校で受けたとか、基地公害でいためつけられた沖縄出身者とかさまざまである。身障者もいる。このように、あたりまえすぎるほどあたりまえのことが、日常の「マスプロ」授業のなかでは、忘れられてしまっているのである。

つぎに、前にもふれたことだが、こうしたレポートなり試験なりは、単に点数をつけ序列づけして、差別・選別する材料としてあるべきものではない。これもあくまでも教育の一環であり、学生にとっても、教師にとっても、意味をもつものでなければなるまい。そうした意味で、かなりの学生が、「漫然と受けてきたこれまでの教育と、自分の姿勢を見直す機会を与えられてよかった」といった趣旨のことを述べていたのは、一定の効果があったと思われる。評点でAをもらうかどうかといった形式的なことにかかわりなくそうした学生たちは、自分の過ぎ来しかたをふりかえることによって、得たものがあつたわけである。

それだけではない。上に述べたように、学生たちを一人ひとりとして再認識できたというだけでなく、数多くのレポートのなかには、前に述べた通教生のそのように、すさまじいまでの感動を与えることで、教師にも大きなプラスになったものもいくつかある。つぎに紹介する三年のK君のはその一つである。

「二年前の三月三日、父が死んだ。四十四歳だった。私は受験と入学手続きのため上京していた。三月三日午前十時、入学金を納め、学生証引きかえ用紙をもらいに法大田町校舎へ行った。午後二時五十分すぎ、田舎から電話があつた。父が倒れた。脳溢血であつた」

「父の急死は衝撃的だった。両足の震えがとまらぬ思いであつた」

父の死後、彼はいろんな事を考えた。とくに経済的な問題である。姉は結婚していたが、残された母の生活、そして上京しての自分の生活ももちろんある。結局アルバイトしながら学校へゆくことにして、とにかく三年の今日まで、バイト、バイトの毎日だった。

「自分で働かなければ、とたんに飢えてしまうのだ。甘えるヒマなどあろうはずがなかった。それでも、いや、だからこそ、自分が大学へ何のために行くのかとただただ自問した」

一年の秋、これ以上大学へ行っても意味はないから、田舎へ帰って母と暮そうと考えた彼は、地方公務員の試験を受ける手続きまでする。しかし、友人は何とか学校だけは行けという。結局大学に止まった。

「私は、二年後のいま、過去をふりかえった時、学校を続けてきたことが果して正しかったかどうか——。わからない。確かに二年前の私は今にも増して「甘かった」。

学費や生活費は自分で働いて出している（当然！）。しかし大学で何を得て、何を学んだのだろうか。私は深く、深く自分自身に問うべきである。

中学・高校と私は、ただ受験勉強さえすれば、経済的な心配などなく、高校・大学とスムーズに行けるものだと思っていて疑わなかった。しかし、父の死を契機として、自分の姿勢が問いただされた時、私はモロくも崩れさった。自分が大学へ行くのは、なんのためか。何をしにゆくのか。何を学びに行くのか。どの様な人生を自分は目ざしているのか。

私は震えた。ガクガクと足はふるえた。私はそれらの問いに対して答えられなかった。高校時代そんなに真剣に考えてもみなかったのだから、無理もないと言えと言えないこともなかった。だが、そのような問いを自らに投げかけず何故、私は大学へ行こうとし、行ったのであろうか」

彼の高校はいわゆる「進学校」であり、大学へ行かず他の道を進むことなど考えられなかった。テスト、テスト、テストの連続である。そこでは、テストの点数が悪ければ、「お前就職するしかないナ」と、就職する人間を蔑視するような「教育」しかなされていなかった。

この年の春、彼の従妹が公立高校を受けて落ちた。同様に公立に落ちた彼女の友達も、ほぼ全員、私立の女子校へ行ったが、彼女は行かなかった。いや行けなかった。いわゆる母子家庭で私立へゆける金がないのだ。彼女は友人の制服姿を見て泣いたという。彼女は、パン屋でアルバイトをしながら、来年めざして家で勉強をしている。

「のう、う」と真新しい制服を着て、さもそれが当然であるかのように思い、学校へ行く友人と、その姿を横目で見ながらパン屋で働く彼女。

△教育とはいったいなんなのか？▽

パン屋で働きながら、彼女はまさしく「教育」されるのだ

彼はある新聞の編集局で雑用係をして働いている。働いている時ほど、本が読みたくなくなり、大学の講義に出たくなかった時はなかったが、そんな気持ちで授業に出た彼は二課目の授業以外はことごとく期待が裏切られたという。

「自省、自省、自省。自分で自分を『教育』してゆくことは可能であろうか？ 自分にとって『現実』の方が強いヤスリだった。反省、反省、反省。教育を考えることは、自分を考えることではないだろうか。どのような教育を受けてきたか、どのような教育を（自分に）してきたか——。教育は、ひとえに個人個人にかかわってくる。生き方の問題か——」

さて、千通をこえるレポートに提示されたそれこそ千差万別の問題点を立ち入って整理することはきわめて困難な作業である。それはいづれ機会を改めてということにして、ここでは、全体を通じての大まかな印象めいたことを列記して、本稿を終えることにしたい。

「これまで受けてきた教育をふりかえって」というのには、家庭教育もはいるわけだが、家庭教育にふれた学生はごく少数だった。小学校、時には幼稚園からはじまる学校教育は、今から十年以上も前の時代だから、ごく一部の例外を除いては、だいたいのんびりしたものだった。中学校に入って、教科別担任となり、英語が出てくる。クラブ活動もはじまる。一・二年はまだいいが、三年になると高校受験である。テストのたびに成績が上位だけでなく、全員廊下に貼り出されたりするようになる。高校は、早いところは一年から、おそくも三年には国立理系文系、私立理系文系と分けられ、ニュアンスのちがいはあっても、一様に「戦場」であり、「地獄」であり、「悪夢」であり、「暗黒時代」である。わずか高校時代が非常によかったと言っているのが、大学受験から見放された定時制や職業高校の出身者であることは、きわめて特徴的といってよい。このことは、前にふれた地方スクーリングの通教生の場合も同様である。

併設の高校から進学した学生もかなり多い。女子高からはごく僅かであるから今はおくとして、A高出身者は共通に在学間に四人の自殺者が出たこと、それについて教師は時間を十分かけて話しあうというようなことをしてくれなかったことを訴えていた。B高の場合は、学生によって評価が真二つに分かれる。「文献学習」や「特別研究」におけるグループ活動の重視や古典の精読、中央委員会という自治会の活動など、一方では「非常によかった」という者と、「かたよっており教師のおしつけ」と反撥する者と、ほぼ半々になろうか。どちらの高校の場合も、大学への推薦に漏れた学生の問題と、推薦されても成績によって必ずしも希望学部へ進めない問題がある。

小・中・高を通じて共通なのは、教師の役割の重要なことである。たとえば中学のころ嫌いだった数学が高校で好きになったというような学習の面でも、人間的なふれあいの面でも、学校がよかったという場合も悪かったという場合も、いずれも教師が登場している。

さてやっと入った大学はどうか。はじめにヘルメットとゲバ棒、そしてマスプロ、休講、授業の味気なさ……。前期二年は教養課程ならぬ「休養課程」であり、マージャン、酒、煙草が身につく。三年になり四年になっても、「経済学ってどんな勉強なの？」と弟や友人に聞かれて答えることもできない。そして学校教育をふりかえってみると最も有意義だったのは小学校時代で、逆に最も無意味なのは大学時代ということになる。せいぜい意味があるのはゼミやクラブ、サークルということになるが、そうしたものにも入っていない多くの学生はどうなるのか。

「大教室での半分寝ぼけたような授業。キャンパスは人だらけ。しかしそれにもかかわらず、一日誰ともしゃべらなかった。そう、しゃべったのは食堂で『法政ランチ』と言ったその一言だけだった。そのような過密の中の孤独。まさに大学における生活はそれまでの生活とは全く違った別世界のような生活である。なぜこんなにも激変するのか。それは、大学は入試に合格した時点で事実上彼にとって重要なものではなくなるからである。合格してしまえば、あとはのらりくらりと単位をとって、押し出されるようにして卒業するのを待てばいいのである。いわば大学における生活は、大部分の者にとっては、激しかった受験戦争の疲れをいやす休憩であり、大学は実社会に出るまでの数年間を遊んで暮らすための青年幼稚園である。」

大学で学んだことについてある学生はいう、「他人の金を横取りして殺人資金にするような『自治』の中では決して学問思想の自由はありえないということが、ある意味では法政で学んだことの大きな一つである」

教育経済論の授業は、今年度は夜間部である。公開課目で他学部 of 学生も聴講しているが、そうした学生もふくめ登録は六一九人と相変わらず多い。前期は、昨年もおいで頂いて学生に大きな感動を与えて下さった白井家光さん、明星学園小・中学校の教諭の無着成恭さん、それに共同通信社の記者の斎藤茂男さんに話をしてもらった。三人とも実に感銘深い「授業」をして下さった。今年の夏のレポートのテーマも、昨年同様、「これまで受けてきた教育をふりかえって」である。夜間部だけに、さまざまの「人生劇場」的な軌跡をもつ学生も多いことだろう。山と積まれたレポートを想像すると、いささかうんざりもするが、教師を感動させ、「教育」してくれるレポートも少なからず期待できる。後期に外部からどなたをお招きするかは未定だが、そこでも、ともすれば情性にのめりこみがちな「マスプロ」大学の授業に、学生に、そして教師に、大きな衝激を与えて頂けるものと信じている。